
虚構の記憶

M

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚構の記憶

【Nコード】

N7843D

【作者名】

M

【あらすじ】

幻想的でも、哲学的でもない。寝ている間に見た奇妙な夢を引きずっているようだ…ある冬、最近思索的になった『私』ハンドルネームは「アン」。彼女はその2日間、錯綜する記憶に何を見るのか。

1: イメージの裏切り

こんな事があった。

月曜日の朝、寝ぼけながら赴いた私をしかるべき場所で待ち受けていたのは鉄骨でぐるりと囲まれた建物だった。目の前を、ヘルメットに地下足袋の男達が通り過ぎていく。驚愕で、眠気は吹き飛んだ。

まさか、この土日で潰れたのか。冗談じゃない。

別に100%好きこのんで来ている訳ではないが、私達は平日の貴重な7〜8時間…つまり1日の3分の1をここで過ごさねばならぬと言うのに。どうしてくれる。

そんな、私の深刻な苦悩は、事もなげに中へ入っていく友人の登場と共に、杞憂に終わった。

「耐震補強工事が始まるって金曜に連絡あったじゃない、聞いてなかった？」

私から『初耳だ』と言うほづけた雰囲気を感じとつたのだろう、彼女は返答を待たずに『またばーっと考え事してたんでしょ』と笑い飛ばし、一足先に階段を上った。

確かに、と思う。

年甲斐もなく、とか何とか言われるかも知れないが、最近自分でも思索的になったなと感じる。さながら連想ゲームのように考える事が続いていく。時に疑問にぶちあたり、何とも歯痒い気分になる。

人間は考えるナントカである、と、どこぞの誰かは言ったらしいが、考え事ばかりしてはいられないと言うのも社会生活を送る人間

の性である。階段を上りきった時にそう実感し、ため息をついた。ロッカーに荷物を入れたら、自分の机について、しばしの間何も変わらない窓の外を眺めて思索にふけるというのが最近の日課であった。が、しかし。視界を地下足袋の男が横切っていく。ここは2階である。

よく考えれば、別に驚くことではなかった。男は空中浮遊とは程遠く、しっかりと板を踏み締め歩いている。どうやらこの建物を取り囲んでいるのはただの鉄骨ではなく足場だったらしい。今ふと思ったのだが、ビルの窓を拭く人がスパイダーマンの格好をしたらかなり受けがいいのではなからうか。

確か、こういう風に高所で作業をする人にとび職と言ったわけ。『とび』は鳥の『とんび』の事らしいが、私は最近まで『飛び』だと思っていた。

「建物の工事はさ、飛び回ってるだけじゃなくて、ちゃんと地に足を付けてなきやばいじゃん？」
とは私に間違いを指摘した友人の言葉である。根拠はないが妙に納得してしまった。

それが、数週間前の話。

今、鉄骨もとい足場は屋上の高さまで達し、建物全体がネットで覆われ、いつそう『工事中』の様相を呈していた。

壁に赤や青のスプレーで印がしてある。縦横無尽に走るその線を見て、商店街の、通称『シャッター通り』の落書きを思い出したと言ったら、作業員の人に失礼だろうか。

それと、窓から網越しに見る景色は、細かく区切られて、ゲーム画面のドットに思えた。

それにしても、頭に『鉄骨で囲まれる＝解体される』の構図が出来るようになっていた私にとって、今のこの状況はかなり奇妙だった。日

中こうして過ごしている間にも、ドリルやら何やらの音が聞こえてくるのだ。それでも私達に配慮をした音量らしい。

私達がまだ中にいる状態で突然崩されたら・・・？

ありえない、非現実的だ、とは分かっている。ただ、私にとっては工事中の建物の中に私達が平然と存在していること自体が、すでに非現実なのだから仕方ない。

まるで窓の内側と外側で時空がねじまがってしまっているような私達が知らない内にいるべきでない場所に迷いこんでしまったかのような違和感。だから、私は、工事現場のシヨベルカーに、もしくは時空のひずみに、この空間ごと潰されてしまうような気がして寒気がする。

そう、非現実。まるで夢の中のように・・・

ああ

『窓』で思い出した。

1…イメージの裏切り（後書き）

こんにちは、Mといます（^-^）ファンフィクションでない、オリジナルの小説は初挑戦です…はらはらしてます（笑）一人称もどきにも挑戦…無謀だ…（笑）ジャンルの分類に迷ったんですが…『文学』にしちゃっていいのかなーと戦々恐々です（笑）この間新聞の広告見てたら、DEATH NOTEの小説版、著者名が『M』だったんで腰抜かしそうになりました…！適当にイニシャルで付けたPNなのに、大変な人と同じになってしまいました…（苦笑）その人と私じゃ文章が雲泥の差でしょうから（笑）、間違われる事はないだろうなと思いますが、改名も考えた方がいいんでしょうか… えー、この小説ですが…舞台は冬なので季節に合わせて投稿したかったんですが、最近はまだ寒さも緩んできちゃって、あちゃーって感じですよ（笑）あらずしも、もう少しうまく書けるようになりたいです（´・`・´）ずっと『私』の『考えごと』が大半を占めていくと思いますが、くどくならないように、かつ、『私』が感じる、いろいろな出来事への妙な違和感、ミステリアスな部分が伝わるように書けたらいいなと思っています。よろしかったら次話以降もお付き合い下さるとうれしいです（´ー´）

最後に、サブタイトルの元ネタを、『イメージの裏切り』 作：マグリット

2…人間の条件

小さい頃、親に連れられて、誰かの結婚式 いや、披露宴だったか に行った時の事だ。そのパーティーが、親戚のものか、父の職場の人のものだったかは覚えていない。はっきり言って、会場で暇を持て余していた私にとって、そんな事はどうでもよかったのだ。

時間が来て、円いテーブルの並んだ、人が多過ぎる部屋を脱出した方がいいが、会場の外でも親は久しぶりだの何だのと他の大人達と立ち話をしていた。周りは私の知らない人ばかりであったから、なおさら憂鬱は増した。私はその空間に飽きたというより最初から嫌気がさしていたのである。

パーティーで出された料理にしても、どれもこれも見慣れない物で、ゲテモノにしか見えなかった。ゲテモノだ、という事しか覚えていない。唯一安心して口に運べたのはケーキのみ。

話が前後したが、要するに、私の、そのパーティーについての記憶がはつきりしていないのは、単にそれが昔の事だからというだけではなく、それに私が嫌悪感を抱いていたという事が大いに貢献しているか、影響している…そのように、今の私は当時を振り返り解釈している。どうせなら消えてしまえばいいと思うのだが、記憶というものは早送りも巻き戻しも繰り返し再生も思うがままであるのに、消去だけはビデオやDVDのようにはいかないのが悩ましいところである。

…つい不満を並べ立ててしまったが、このパーティーの感想など、本当は『最低』の一言で済んでしまうものなのだ。今の私が、ほんのカケラほどの断片的な記憶に無理矢理注釈を加えただけ。その事は、念を押しておきたい。

なぜって、幼い私にとっては、その後の出来事の方が本題 ずっとずーっと重要だったのだから。

いや…今でも。

しつこく述べたように、パーティーの記憶はほとんどないにも関わらず、1つだけ、まざまざと蘇る事がある。

ひよつとすると、これがなければ、私はパーティーの記憶も完全に葬り去っていたのかもしれない。パーティーは、『それ』の近くで、少し前まで行われていた。ただそれだけの関連性で繋がっている、ほんのオマケ。

親達が立ち話をしている間、私は息苦しいその場を離れる事にした。

もちろん、そこから建物の中を走り回って全制覇しようとか、一人で先に家に帰ろうとか等という冒険をするつもりはなかった。ほんの数メートルの回避だ。

…この辺りから、私の記憶はやけに鮮明なのである。母に繋がればなしで血行が悪くなっていた手をようやく下ろし、開放させた事。大人達の脚の間をいとも簡単にすりぬけた事。

そして 廊下の反対側にあった『窓』。

会場があつた側と反対方向、壁があつてもいい場所は、全面ガラス張りだったのだ。所々に窓枠と、それに付随した、纏められたカーテンがあつた。

景色でも見てみようか…多分当時の私はそれを暇つぶしの手段に選んだのだ。

ずっと、ガラスぎりぎりの所まで歩を進める。もう辺りは暗くてどこを見てもネオンばかりだった。

顔をずっと近付けていたら、息でガラスが少し曇った。私はそれを手で拭いた後、息がかからないように半歩下がった。しかし、そうすると今度は室内の煩雑な映り込みが気になり、やはり景色は見

づらかった。

その時、私は恐ろしい事実気付いてしまった。

立ち止まったまま、視線だけを斜め横にずらしてみた。立ち話に群がる大人達が見える。そして、今一度正面：私。

私が映っている事自体は、我が家にも鏡という物はあるから、何ら驚くべき事ではない。

でも。家にある鏡ならば、鏡の向こう側に映っている場所も家中。向こう側の私は、こちら側と変わりない空間に立っている。

なのに、この窓の向こう側は夜景。映り込むこちら側の風景と、向こう側の真っ暗闇が混ざり合っている。そして向こう側の私はそんな場所に立っている。

立っている？

ほんの20cm程しか離れていない向こう側の私の足元に、目線を落とした。ガラスの向こうの、ビルの外壁の厚み 私はそこに、かろうじて足を乗せていた。かろうじて。

そこが、何階であったかなどは、もちろん記憶にない。ただ、視覚的には その時見た窓の外の風景を頼りに判断する限りは 転落死するのに十分な高さであった事は確かだ。

ほんの少し、足を動かす。向こう側の私の足も動く。

もし、私が足を後ろに動かせば…

怖いもの見たさ、だった。

向こう側の私はどうなるの？

今ならば、もちろん、こちら側の私を差し置いて向こう側の私の存在がおびやかされる事などないと分かっている。

ただ、当時の私は…

左足を、半歩下げた。向こう側の私が下げたのは…右足でいいのだっけ？

私から見れば左に変わりないのに、向き合った途端、左右を反対に考えなければならぬなんて、何と面倒なことか。

向こう側の私の右足は、外壁の厚みに、もう爪先しか乗せていなかった。

右足を動かそうと、左足に重心を乗せる。ああ、もうその時点で、向こう側の私はビルの縁から墜ちてもおかしくないのだ。

今度はゆつくりと、擦り足で動いた。そして、向こう側の私の左足は、完全に外壁から外れた。

落ちない…

いや、まだ十分じゃない、と、あの時の私は思っていたと思う。向こう側の私は、まだ右足の爪先がビルの縁にかかっていたのだ。あれを好奇心と呼んでいいのだろうか？

もし、両方の足が離れたら…向こう側の私は、本当に落ちるだろうか？

もし、落ちたら…

もう一人の私は、死んじやうかな？

その次の瞬間、向こう側の私の足は、完全に…

離れた。

2…人間の条件（後書き）

反省会 ちょうど第1話から90日あいた投稿となりました、もう初夏ですね…（苦笑） 言い忘れ（書き忘れ）てたんですが、この話の『私』はなんの自己紹介もしてませんが、私じゃないです、念のため（笑）話の中に、私の体験が入る事もあると思いますが、一応、枠としては『私』 私ということ。 今回のタイトル『人間の条件』もマグリットの絵からとりました。間違ってたらすみません（><）

3…考える人

その後の事は、その前の事同様に、あまりよく覚えていない。別に、その後気を失ったのだというような、ドラマじみた事があった訳ではない。ただ、覚えていないだけ。

あの戦慄に比べたら、どのようにその場を去って帰宅したのかなど、どうでもよかったただけなのだ。

そうして今まで生き残ってきたその記憶

思いおこす度、未だに、あの妙な浮遊感と 下手したら『向こう側の私』を殺した事になっていたかもしれないという恐怖に似た罪悪感が甦ってくる。

だって ありえない事だとは分かっているが もし向こう側の私が、こちらの私と別の意識、人格を持っていたとしたら…向こう側の私にとってこちら側の私は残酷な人殺し以外の何者でもなかっただろう。否応なしに、こちら側の私の動きにしたがって、わざわざビルの高みから落ちに行かなければならないのだから。

そして、落ちなかったからいいようなものの、あの足元はあまりにも不確実。もし、もし ……

目に見えない『床』が音もなく消えて、足を支えるものがなくなつて。

突然視界が上に動いて、髪が逆立って。

加速しながら、臓器が浮き上がるのを感じながら、ひたすら落ちて。

そして…

そこまでは、下りのエレベーターやジェットコースターでの経験から想像できるが、地面に激突する感覚など、さすがに経験はないし、想像したくもない。

何をやってるんだ。

ふと我に返って、そう思った。

あの事を思い出す時、考えるのはいつも同じ事。墜ちたらどうしよう ずっとそつだ。

そんな、進歩のない事を考え続けて、成果のない思索に縛られて何になる？

こんな事やって、ほうけている場合ではない。もうそろそろ、私に与えられた領分を全うしなければならぬ時間だ。

机に向き直る前に、名残にと窓の外を見遣った時、足場を歩くヘルメットの男と目が合いそうになって、全力で顔を逸らした。

今日も、半日を消化した。

首に巻いたマフラーに顔を埋めるように俯いて帰る。手袋を忘れたから、手はポケットの中。

『転ぶといけないから、手はポケットから出しましょう』とかいう注意を、この歳になって守るつもりはない。駆け出したら数メートル毎にこける、幼稚園児のような等身ではない。

私くらいの間人間が、ポケットに手を入れたまますっ転んで擦り傷を負うのと、極寒の中、無防備な手をさらして冬の間中しもやけに苦しめられるのでは、そうなる確率から言っても後者の方が圧倒的に嫌だ。リスクが大きい。少なくとも私はそう思う。女は概して冷え症だ。

…別に、そんなくだらない確率を真面目に考えるつもりはないが、『ちよつと計算してみようかな』と思う自分があるのが恐ろしい。そんな事、何の利益もないのに。

「じゃ、またね」

ふいにそう言つて、別れ道で友人は去り、後ろ姿は小さくなって『背景』の群集に同化していった。

『ふいに』と言つたが、それは単に私が、途中まで一緒に帰つていてくれた彼女を意識の外に置いていたからに過ぎない。

彼女の話には、（我ながら巧妙に）適当な返事をしていた。

「考える人」は。

もとは巨大な彫刻の登場人物の一人だったという。『地獄の門』。

地獄に落とされ苦しみ叫ぶ者達、その惨状に気付いているのかいないのか、彼は丸まったまま『考え』ている。

彼は地獄について考えているのだろう。実に哲学的だ。

私が最近考え込む事はそんな『哲学』と名がつく崇高な物とは程遠い。

そう、実生活に全く役立つ事もなければ、風流でもなく、人間の真理だとかそういう事には何も関係ない。要するに、本当に、くだらない事なのだ。

程なくして、近くの私立小学校の生徒らしい児童数人とすれ違った。『寿司屋で何を頼むか』『サーモンはあまり好きではない』などと口走るのが耳に入る。

彼らはおそらく1年生…いや、2年生だ。全く見知らぬ顔だが、何となく分かる。初々しさの中に、ふてぶてしく気取った先輩面が見え隠れするあの態度。

ふと、私の頭の中は、まだ彼らのレベルから抜け出せていないのだろうか、と思った。

後方から風が吹き、枯れ葉が私の歩みについてくるようにカラカラと転がっていた。

3…考える人（後書き）

反省会 しばらく更新ペースが亀でしたが、ついこの間から、なんだかどんどん書けそうな気がしてきました。3つの連載を順々に書いていくというノルマに対して億劫さを感じなくなっただけというのか、文章をすつと打てるようになったというのか。これをスランプからの脱出というんでしょうか。 今回の第3話で、初めて作品名が本文中にどーんと出てきました。これが最初で最後かもしれません。 サブタイトルを元ネタと少し変えようかどうか考え中です。 今回の元ネタはもちろん、ロダン作『考える人』。

4…街の神秘と憂鬱

どこかしらで、建物の解体・建設は常に行われるような気がする。

今、右手の奥まった所に見えている現場では少し前から解体が始まっていた。何の建物だったかはよく分からないが、わりと高さがあった。

鉄骨と網 遠目の判断だからもしかするとビニールシートかもしれない とで囲まれ、真正銘解体工事。それは、今の網の高さが元の建物の半分くらいになっている事から伺える。網の中は見えないが、少なくとも網の上端から上は虚空だ。

私が先程までいた所とは違う、緑がかった網が、整然と縦横に組まれた鉄骨にぴたりと、タイル地のように張られている。上端の網が一枚、角がめくれて、ぴらぴらと風で動いていた。

もし、突風で、あれが全て花びらのように散っていったら。

中の建物も、つられて破片になっていくのだろうか。

ちょうど 以前テレビで見た バグかウイルスかによって、ざあと崩れ去っていくコンピューターのディスプレイ上の文字みたい

に。

そんなばかな。

私は思い直して歩みを速めた。

家は坂を少し登ったところにあって、わりと周りが見渡せる。ふと、日が沈む西ではなく、東の空を眺めてみた。

東の空も、西ほど明るくないが、昏間とと違う色を見せている。ずっと向こうの、マンションやら何やらに遮られた地平線に近いあたり、闇になりかけの青色ではない所：上から赤、青、黄：三色？

私は、首がマフラーの中で縮こまる程寒い中、つい立ち止まってしまった。

状況を整理してみよう。赤は、斜陽が東まで届いた色と考えていいだろう。青は、太陽が沈みかかっているために光が届かない所。この2色は、珍しくも何ともない。では黄色は？心なしか、青い空との境が緑に見えさえる。

…虹でもないのにこんな色になる事があるだろうか？見間違いか？いや、それとも、もっと別の…

しかし、ちらつくネオンが、思考を現実的なものへ引き戻した。あの空の下にあるのは街の中心部。

「…なーんだ」

柄にもなく独り言を言ってしまった。

多分、中心部のスモッグが、周りの色との関係で黄色っぽく見えただけ、保証はないけれど。よく考えたら、昼間でも地平線近くは純粋な白ではなく、灰色がかっているではないか。

街に目を移した。目につくのは、私が昼間を過ごした場所のように網をかぶった、…解体中ではなく建設中のマンション。パチンコ屋のネオンが一際せわしなく踊っているのが分かる。

私は、自分が出した答えに正直がっかりした。もう少し幻想的なものをひそかに期待していたのだが、それは所詮ただの空想であると、自分で気付いてしまったのが皮肉というか、悔しい。

別に、スモッグとまだ決まったわけではないのに。

幻想を信じていたい自分と、とにかく現実的なものに落ち着いていたいという自分がいる気がする。もう、こんなもんでいいじゃないかと。

冬は日没が早い。太陽の光を受けた場所はすでにどこにもなく、光っていた雲も、汚い綿ぼこりのように一様に灰色だった。西の空の色も、名残ばかり。

長居しすぎた。

私は煌々としたネオンに目を細めると、頬から耳にかけて吹き抜ける風を振り払うように、くるっと体を返して勢いそのままドアノブを掴んだ。

「いつつ……」

しまった、静電気を忘れていた。

4…街の神秘と憂鬱（後書き）

反省会　今回は前から書きためておいた所だったので割とぱっと投稿できたかなーと思います。サブタイトルは、まだ考えてない部分は何をつけるか迷っちゃうと思いますが…。元ネタから変えようかどうかもしようかもまだ考え中です。今回のタイトルは『ジョルジュ・デ・キリコ』街の神秘と憂鬱』より。

5…夢(前書き)

今回から、チャット風の文面が入ります。読みにくかったらすみません。m | | m

5…夢

私は、帰宅するといつものように、さっさとやるべき作業を済ませ、自室のパソコンに向かった。スイッチを押してから起動するまでの間、椅子をくるくると回してみたりなどする。

たいして見たいテレビ番組もない、この曜日のこの時間に、私はパソコンをすることにしている。我が家の大黒柱が帰ってくるまでの数時間だ。

と言つても、我が家は、全国的と言われているように核家族であるし、はつきり言えば、しがないサラリーマンである彼に、『大黒柱』の称号は似合わないかも知れない。私は一時彼を『あなた』と呼んでいたが、何年も前の話だ。今は『お父さん』。

一児をもつ男への呼び方はそちらの方がふさわしい、と指摘されたのである。

起動した後は、迷わずインターネットに接続し、いくつかサイトを回る。次が本命・・・一番時間を費やすチャットだ。

もちろん、現実世界でも友達とお喋りはする。しかし、全く違う年代の人と気兼ねなく議論を闘わせるのも悪くない。

私がこの時間にしか来ないのはチャット仲間の3人もちゃんと承知している。『入室』すると、彼らはお待ちかねだった。

みい>やつほお(＾O＾)ノ

みいさん。彼女 確かに女性だと思つていいと思う は、いわゆる『今時の若い人』のようである。

一時期、このチャットでギャル文字なるものを使っていたが、私を含め他の3人が『解読』不可能ということで、最近はたまにクイズのネタになる程度である。とは言うものの、今でも『難解』な表

現が多々見受けられる。私は『今時の若い人』ではないと言うことか、と、彼女の発言を見ていると思う。

じろ>アンさん、今日も時間通りですね。

言い忘れたが、アンと言うのが私のハンドルネームだ。

ケイ>尊敬ですよ、その几帳面さ(笑)

男性陣の挨拶も一通り済んだ。私達は結構長いつきあいになる。1年弱といったところか。

まずは、近況報告などの雑談をするというのが、ここ1年でできた流れである。みいさんは最近枝毛に悩んでいると述べた。私が、耐震補強工事のこと、そして今日見た『ゲーム画面』について言及すると、じろさんは、『モザイク画ともいいますね』と美術専門用語を駆使して指摘した。

私達は本題に移ることにした。議論とか本題とか言ったが、要は、おすすめの本は何だとか、今こんなドラマを見ているとかいった、雑談と区別がつかないような、たわいない話である。ただし、今日の私にはいつもと違う、どうしても振りたい話題があった。

ケイ>いきなりっすけど、皆さん夢ってありますかー？

驚いたことに、どんぴしゃりとは行かないが、私が話したい事の取っ掛かりになりそうな話題がケイさんから出た。後で楽に切り出せそうだと思いつつ、まずはケイさんの問いへの返事を考える。

アン>将来の夢、ですか？

ケイ>あ、子供の頃の夢でもアリっすよ(^^)ノ

じろ>ほー、なんでまた？

ケイ>ぶっちゃん俺フリーターなんで皆さんの意見を参考にしたい！(笑)

みい>ぶっちゃんけすぎ！(爆)まじ初耳なんですけど！(><)

同感。ケイさんははつきりと職業を明かした人第一号だ。もっとも、みいさんは、明言はしていないものの、女子高生ではないかと、私はうすうす思っているが。

さて、将来の夢…か。

みい>あたしは、この世の中からテストが無くなればいいな。。。

小文字を多用したりするこの文体にも、ようやく慣れてきた。しかし、私はこれから先もこんな風には書かないと思う。大してタイピングは速くないので、キーを余分に押すのが惜しいのだ。

テストという単語が出た時点で、学生だという推測はかなり真実味を帯びてきた。

じろ>みいさんののは、こうなりたい、じゃなくて、こうなってほしい、っていう夢なんですね。

ケイ>2人はどうですか？

ふと、先程見たスモッグが浮かぶ町の風景が蘇った。

たった今、決めた。

アン>自然いっぱい場所に住みたいです。南の島とか。

アン>あ、でも友達と離れるのはいやだな。

色とりどりの花や青い海に続いて、頭に漠然と浮かんだ不安を、そのまま直後に付け加えた。

ケイ>いいつすねー南の島(^ - ^)

じろ>私の小さい頃は、田舎は嫌だ、東京に行きたい、みたいな歌が流行ったんですけどね。

ケイ>今の人は逆ってことすか

じろ>でも報道では人口流出が止まらないと言ってるし…

ケイ>じゃあ、やっぱり働き盛りのうちは都会がいい、と

みい>え〜、働く人だけじゃないって!!

みい>あたしにとっちゃ、コンビニないとか、ケータイ使えないとか、まじ考えられない!(>口<)

みい>そうそう、もし引越し実現したら、あたしにも招待してね〜
(^ ^) / なーんて

アン>どうでしょうねー…実現はしないかも。

ケイ>じろさんは？

こんな具合で取り留めのない『会話』は続いていく。

この話題も皆一通り発言が済んだところで、そろそろ切り出すタイミングだ。

アン>夢で思い出したんですけど、寝てる時に見る夢の話。

本当は先に述べた通り、パソコンに向かう前から考えていた話題なのだが、説明が面倒なので『思い出した』と書いておいた。

アン>どうして、人って夢を見るんでしょうね？

ネットの検索にかけたところで、ちょっとやさそつとじゃ出ない答

えだと、自分は思った。残念ながら家の百科事典にも載っていないかった。もっと分厚いものなら載っているのだろうか？

とにかく、手近なところでは調べが付かなかったので、この3人から意見を聞きたかった。

『夢』について、今日、突然に疑問が湧いてきたのだ。『どうして見るのか』以外にも、色々。

ほったらかしていたら、忘れてしまって、答えを得る機会をなくしてしまうと思った…何となく。

ああ、そうだ、話を切り出そうとして割り込まれ、相手の話が終わるまで待って、いざ話そうとすると、何を話そうとしていたのか忘れてしまう、そんな感じだ。

じろゝえーっと、睡眠っていうのはレム睡眠とノンレム睡眠に分けられててですね。

すぐに反応があったことにほっとしつつ、じろさんの意見をしばらく『聞く』ことにした。

さあ、じろさんの『講義』の始まり…

答えは、得られるだろうか。

5…夢（後書き）

反省会 中間試験がやっと終わりました。ぎりぎりの一夜漬けでした（苦笑）

えー、いかがだったでしょうか。『私』がチャットにはまってるということで、そういう場面を書いてみたんですが…私自身が、チャットへの参加経験がないに等しいので、文面がリアリティに欠けるかもしれませんorz

『みい』の顔文字とか小文字使う文体とかを必死で取り繕って疲れました…友達から来たメールを参考にしながら。

今回のサブタイトルはなかなか思いつかなくて迷ったんですが…ルソーの『夢』です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7843d/>

虚構の記憶

2010年10月14日17時21分発行